

進行がんのステント治療

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 76 》

がんが進行すると食道や胃、十二指腸、大腸などの消化管が閉塞してしまうことがある。食事をとれなくなるだけでなく、腸閉塞を起こして命に関わることもあるという。従来はバイパス手術や人工肛門造設術が行われてきたが、近年は患者の負担が少ない消化管ステントが有効な治療法の一つとなっている。

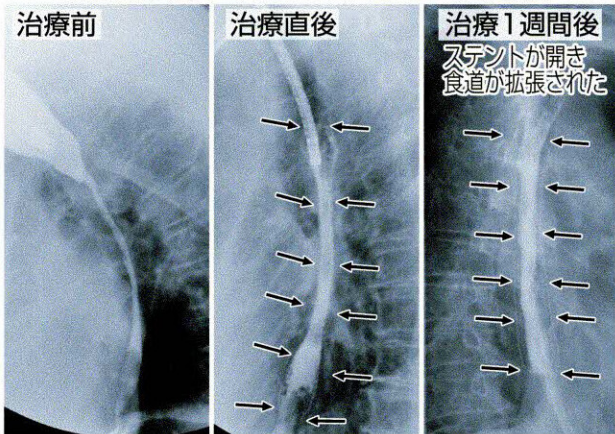
県立中央病院内視鏡科科長の細田健司医師によると、増殖した腫瘍で食道や胃、十二指腸が閉塞すると、胃に消化液がたまって吐いてしまったり、食事ができなくなったりしてしまう。大腸が閉塞すると、腸管内がガスや便がたまって全身状態が急激に悪化する。



細田 健司
内視鏡科科長

消化管広げ食事、便通可能に

食道がんに対するステント治療



これまで食道などの閉塞には、閉塞部位を迂回するためのバイパス手術や、管を挿入して消化液を抜く方法が行われてきた。大腸が閉塞した患者には緊急手術が行われ、一時的に人工肛門を設けざるを得なかった。しかし「緊急手術は便による手術範囲の汚染により術後の合併症が起きやすくなる」と細田医師。全身状態が悪く、手術できない患者もいるという。

筒状の金網で閉塞した部分を拡張させる消化管ステント。食道、胃、十二指腸の場合は口から、大腸の場合は肛門から内視鏡を挿入し、閉塞した部分に達したらガイドワイヤを通してステントを挿入し開いていく。ステントは形状記憶合金でできているため徐々に広がり、3〜4日で完全に拡張するという。

大腸がんの場合、切除が可能な患者でも手術前にステントで通過障害を解消することで、より安全性の高い待機的手術を行うことができる。

そこで注目されているのが、

県立中央病院では食道ステントは20年ほど前から、大腸ステントは約2年前から始め、実施件数が伸びてきている。細田医師は「手術ができない患者でもステントによって食事をとれるようになり、便が通るようになる。QOL(生活の質)の大きな改善につながる」と話している。Ⅱ第2、4木曜日に掲載します